
オゾンの子ども

山田太郎左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オゾンの子ども

【Nコード】

N9892L

【作者名】

山田太郎左衛門

【あらすじ】

現在↓過去↓未来の3部で構成しています。

ジャンルは不明・・・。

愛と友情の物語、でしょうか。

ファンタジーといえば、そうなのかもしれません。

死んだり消えたり苦しんだり救われたり出合ったり別れたりします。

元ネタのごとく、「こんがらがってくっついてまたまた離れる永久運動」の末にどういう結末になるのが焦点です。

スケールをでかくしたがるのが癖になってまいりました。

小說化希望。

あぶない子ども 1

夜の閑静な住宅街。

郊外の山を削って作られたその場所で俺は出会った。

彼女は大きな羽根を広げて、夜空から舞い降りてきた。

月の明かりを遮るように空に浮かぶソレは、確かに天使だった。

天使は田中さんの家の屋根で羽交を休めている。

俺は朝が来るまで、そこで天使を眺めていた。

美しいとか、愛らしいとか思ったわけではない。

けれど、目をそらすことさえできなかった。

その姿には、確かに人をひきつける何かがあったのだ。

以来、俺はことあるごとに天使を見つけた。

朝の通学路、夕方のグラウンド。

天使はどこにでもいた。

群れをなして飛ぶことさえあった。

天使を眺める俺を友人達は心配した。

「お前、なんで毎日カラスばかり目で追っているんだ？」

その言葉をきいて俺は絶句した。

そうか、あれはカラスだったのか。

少なくとも他の人間にはそう見えているんだろう。

何故俺の目にはカラスが天使に見えてしまうのか。

それでも確かに俺にとってあれは天使なのだ。

俺はいつしか天使に憧れを抱いていた。

あんな風に空を飛びたいと願うようになった。

空を飛ぶ方法ならば、いくらでもある。

飛行機に乗るのもいい、グライダーでもいい。

けれど俺は、自ら羽ばたく様を夢見た。

それはどんなにか気持ち良いんだろう。

毎日そんなことを考えていたからか、俺は自分でも思ってもみなかった行動を取ってしまう。

30階建てのビルの屋上から飛び降りたのだ。

堕ちながら俺は考えていた。

ああ、たとえあと数秒でこの命が潰れるとしても、おれは確かに空にいたんだ。羽根がないのがいささか残念ではある。

俺は空中で、自らの羽根をシミュレートした。

背中に生えるその器官が躍動する。

折れんばかりに大きく羽ばたいた。

俺は満足だった。

確かにこの瞬間、俺は自らの羽根で羽ばたき、風を切って飛んでいたのだ。

だがいつまでたっても地面に激突することはなかった。

気がついたら俺の背中には確かに羽根があった。

俺は天使になった。

自由に大空を飛ばたく俺を誰も不自然なものとして見てはいなかった。

人間に近づきすぎると追い払う仕草をされる。

きつと今の俺はカラスに見えているんだろう。

それでも一向にかまいはしないさ。

俺は他の天使達に混じって行動した。

やつらは妙に寡黙で、時々理解できない言語で鳴くばかりだった。

案外、つまらないもんだな。

それでも空を飛ぶことだけは楽しかった。

そんなある日、俺は仲間を見る少女の視線に気がついた。

カラスが好きなんだろうか。

飽きもせずはこちらをじっと見つめている。

俺は気づかれないように、そつと彼女に近づいた。

近くまで来ると彼女は気がついたようだ。

彼女が俺を見るとその目は明らかにカラスをみるソレではなかった。そして紡ぐ言葉がそれを証明した。

「ああ、本当に天狗だった・・・」

あぶない子ども2

「僕は人間です」

この言葉を何度口にしただろう。

誰か一人でもこの言葉を信じてくれたならば、僕はこんな目にあわなかった。

けれど僕は、いまこうして見世物にされている。

確かに、まともな教育を受けることの出来なかった僕は、一般的な人間よりも知性の面で劣る存在かもしれない。

けれど僕は確かに人間なのだ。
けして猿などではない。

僕が生まれたのは日光の山中だ。

母親はメス猿だった。

父親も猿だろう。

僕の容姿も必然、猿の如きものだった。

僕は群れの中でも特に賢い存在だった。

乳離れが済んだ直後から、自分で餌をとることができた。

他の猿達を欺くことすらした。

それでも、このときは自分が猿であることを疑わなかったのだ。

自分が人間なのではないかと思っただのは10歳になる年だった。

僕は観光客達の言葉を聞いて、それを覚え始めた。

はじめは簡単な単語だけだった。

食物を得るために必要な単語だけを覚えた。

普通の猿ならばここで終わるのだろう。

だが、僕は言葉を理解したいと思うようになった。

そうして言葉を覚え始めた。

1年も経った頃には簡単な会話ぐらいならできるようになっていた。
僕は自分の言葉で餌をねだるようになった。

「ボク二餌ヲクダサイ」

「ソノ林檎ハオイシソウデス」

言葉を話す僕を見て人間達は喜んで食物を与えた。珍しがって捕らえようとするものもいたが、簡単には捕まりはしない。

僕は猿並みの身体能力を持った人間なのだから。

僕の噂は段々と広まった。

そしてついにテレビニュースでも報道され、地元有志の捕獲チームが結成されることになった。

いくら賢いといっても小学生程度の子ども。

僕はいとも容易く捕らえられた。

そして地元の興行団で見世物にされることになった。

はじめは、何の苦労もなく食物を与えてくれる境遇に、素直に喜んでいた。

ここには温かい寝床も、上等な食事もある。

言葉を使って媚を売る僕は、劇団の人間にも好かれた。

食べたいものを要求すれば、直ぐに用意された。

けれども、所詮は猿としての扱いでしかない。

僕はいつしか人間並みの待遇を要求するようになった。

同年代の人間の子どもの欲しがる玩具を要求した。

学校に通わせてくれるようにも頼んだ。

猿小屋でなく自分の部屋も欲しくなった。

そして人間の娘に恋をした。

団員のひとりを僕は好きになった。

僕は彼女に好かれるように、必死で努力した。

毛並みを気にした。身体を鍛えた。

彼女にして欲しいことはないかと尋ねた。

僕は彼女の要求どおり、彼女のために芸を覚えた。

そのたびに彼女は褒めてくれた。
彼女の喜ぶ姿を見るのが嬉しかった。
彼女も僕を好いてくれているんだ、そう思っていた。
けれど彼女の好意は、猿に対するソレでしかなかった。
けて僕は酷い言葉をぶつけられたわけじゃない。
彼女は僕の愛を否定することはなかった。
だが真剣に向き合ってくれることもなかった。
彼女の笑顔には、たとえ意識していないにせよ、人間の優越と猿への侮蔑の感情が見て取れた。

僕の要求はなにひとつ通ることはなかった。
「何言ってるんだ、お前は猿なんだぞ」
団員たちは僕を猿だとしか思っではないのだ。
人間に飼われる人間。

このとき僕は自分の惨めさを初めて自覚した。
僕は脱出を図ったが、すぐに捕らえられた。
その様を見て団員達は笑うのだ。

「所詮、猿知恵だ」
それ以来、観客達に助けを求めるようになった。
何度も何度も思いを叫んだ。

「ボクハ人間デス。ココカラ助け出シテ」
だが団員達は僕の叫びすら劇の中に組み込んでいた。
僕がどれほど叫ぼうと、観客達には届きはしない。
それでも僕は、団員に、観客に、叫び続けた。

今日も僕は救われなかった。
僕は猿小屋で頂垂れる。
そんな僕の前に、少女が立っていた。
いつからいたのだろうか。
彼女は僕に微笑みかける。

「届いたよ、貴方の言葉」

僕は泣いた。涙が止まらなかった。

少女の言葉は続く。

「貴方なら、ここから出ることが出来るはずだよ。セイテンタイセイ」

あぶない子ども3

私の目の前に、一人の男が座ってる。

男は最愛のわが子を亡くし、絶望に沈んでいる。

男はここで眠り続けている。

私はその前に座り、男を観察している。

眠る男の目には涙が浮かんでいた。

僕が彼女と出会ったのは夕暮れの教室だった。

同じ学校に所属していたらしいが、僕は彼女を知らなかった。

僕が教室でボウとしてしていると彼女が入ってきた。

そうして僕の前に座ると、言った。

「私は貴方の運命の相手です」

なにか断定的な言い方だった。

僕は格好をつけて言う。

「それは一体どういう運命なのか、ぜひとも拝聴したいね」

少し格好をつけすぎただろうか。

彼女は気にした様子も無く応えた。

「もちろん、結ばれる運命です」

どうも変わった女だったが、彼女の言うことを肯定したくなる、そんな魅力があった。

彼女と僕が付き合い始めて10年になる。

今日は少し特別な日だ。

彼女に結婚を申し込むのだ。

彼女が断らないことは確信していた。

僕は彼女の運命の相手なのだ。

当然、僕達は結婚することになった。

そして子どもが生まれた。

娘は健やかに成長し、僕たちの母校に進学した。

成長することに妻に似てくる娘を私は溺愛していた。

不幸が起こったのは娘が高校2年になるある日の晩だった。

部活動もしていない娘の帰りがやけに遅かった。

僕はその日、残業で会社に残っていた。

夜九時を回った頃、妻から電話があった。

この時間になっても娘が帰らないというのだ。

常であれば7時までには帰宅している娘が、連絡も無いまま帰りが遅れることなど今まで無かった。

僕は急いで帰宅し、娘を捜した。

一晩中捜し回ったが、結局娘は見つからなかった。

その日娘は帰ってこなかった。

そして次の日も、その次の日も。

娘が帰ってきたのは3日後だった。

すっかり様相が変わってしまったっていた。

警察の連絡で、迎えにいった先にいた娘は、骨にこびりついた肉片でしかなかった。

私は殆ど白骨となった娘を抱いて泣いた。

これが娘だと言うことを信じたくはなかった。

だが警察が示す情報の全てが、その骨が娘であることを語っていた。

「ちょっとやりすぎだよ」

男の背後で声がした。

私がずっと待っていた声だ。

私が集中力を切らしたので、男は気がつく。

「ああ！愛美！！」

男が私に抱きついてきた。

「やめろ、気持ち悪い！」

私は男の手を振り払う。

男の背後にいた少女が男の肩に手をかける。

「おじさん、この子は娘さんじゃないよ」

男は私をじっと見つめる。

少女が言葉を接ぐ。

「狐に化かされたんだよ」

私は笑いながら男に告げた。

「黄梁の一炊、邯鄲の夢」

青空1（前書き）

全3部で2部だけ相対的に量が多いです。

青空 1

土と草の臭いと陽の光と活気に満ちた人々の声。
それが私の初めての記憶だ。

目覚めたという感覚ではなかった。

その瞬間に自分がそこに初めて存在したのだ。

段々と意識が宿っていく胎内の赤子を羨ましく思うこともある。

私は自分の存在に、徐々に慣れていくことすら出来なかった。

かといって混乱や驚きがあったわけでもない。

それほどに漫然とした誕生だった。

この場所はどうかやら祭りの最中らしかった。

誰しもが1年に一度の無礼講で羽目を外しているようだった。

一応は神事の形式を取ってはいるものの、きつと娯楽以上の意識など無いに違いない。

みんな笑っていた。楽しそうだった。

私はその輪の中に混ざろうとした。

そのとき気がついてしまった。

この社会では、きつと私は異物だ。

私が存在しなくても存在していける世界なのだ。

祭りの風景を見ているうちに、そう思えた。

私はそつとその場を離れた。

楽しそうな声を背に私は泣いた。

あれから何週間も、私は山から村を見下ろしていた。

何度も、あの輪の中に入り込むことを夢見た。

受け入れられるかもしれない。

私も人と交わっても良いのかもしれない。

そのたびに祭りの風景と、そこから遠ざかっていく私の後姿が頭をよぎって、どうしても踏み出すことが出来なかった。

そしてまた泣いてしまうのだ。
きつと、こんな泣き虫は嫌だろう。

そう思うとまた涙が溢れて、そんなことを毎日続けていた。
数日後、山に親子であろう女性と男の子が訪れた。
背中に籠を負って、山菜を摘んでいる。

そして男の子が私を見つけた。

「お姉さん、誰？」

私は応えるべきか迷った。

男の子は質問を重ねる。

「なんで泣いてるの？」

私は涙を拭って笑顔を作った。

「ねえ、山菜ならあそこにも沢山生えているよ」

男の子はそれ以上は詮索しなかった。

そして素直に山菜を見つけたことを喜んだ。

「ねえお母さん！こんなに沢山あったよ！あのお姉さんが教えてくれたんだ」

母親がこつちを見る。

「誰もいないじゃないの」

私は親子に近づいていく。

それでも母親には、私が見えていないようだ。

「ねえお母さんには見えないの？」

男の子は困惑しているようだった。

母親が男の子に語りかける。

「あんたには山の神様が見えてるのかもしれないね」

私は山を降りた。

そして大きな声で呼びかけた。

「私の声が聞こえますか？私の姿が見えますか？」

けれど誰も応えてはくれなかった。

私の姿は、見えていない。

声は響いてはいない。

私は初めから、人と交わることなんか出来なかったのだ。急にまた寂しさが押し寄せてきて、涙がこぼれた。

そしてこの寂しさは、消えることが無いだろうと思った。

私は村の中で、一日中泣いた。

そして次の日、声をかけられた。

あの男の子だった。

私はその日から男の子と話をするようになった。

男の子はアオという名前だった。

アオは私を神様と呼んだ。

それがなんだか嫌で、私は呼ばれるたびに不機嫌になった。

そんな私にアオは名前をあげると言った。

「僕がアオだから、君はソラだよ」

安直だ。その日はよく晴れた空だったから、きっと思い付きだ。

けれど私は嬉しかった。この空が私の存在の証だと思った。

きっと空を見るたびに思い出すことが出来る。

私はアオが大好きだった。

一緒にいられるだけで毎日が輝いていた。

私たちはよく山で山菜取りをした。

当時は子どもと言っても働かなければならなかったのだ。

もちろん、大人よりも格段に楽な労働ではあった。

その日アオも他の子ども達と山に入った。

アオは私も誘ってくれた。

私たちは一緒に山菜を取っていた。

アオとお喋りをしながらの労働は苦ではなかった。

「ソラは山の神様だから、山菜の沢山生えている場所とか、知ってるんでしょ？」

「だから神様じゃないって言ってるでしょう？」

アオはなおも食い下がってくる。

「でも初めて会ったとき、山菜のある場所を覚えてくれたじゃない」
「あの時は山に住んでいたから・・・」

アオは不器用な子だった。

話し始めると作業の手が止まった。

アオの分は殆ど私が摘んでいた。

そのうち他の子ども達が話しかけてくる。

「ねえアオ、誰と話してるの？」

「山の神様だよ。見えないの？」

その子は少し気味が悪いようだった。

その子が離れていって、しばらくすると集団の中では一番身体の大
きな子どもがアオに食って掛かった。

「神様が見えるなんて、嘘つきだ」

そういつてアオをイジめようとするのだ。

だがアオは気にした様子も無かった。

「君に見えなくても、僕には見える。それでいいじゃない」

アオの対応は柳に風といった様で、争いが成り立たない。

それでも他の子ども達にとって気味が悪いのに違いは無い。

このままではアオが仲間はずれにされてしまう。

その日の作業が終わってから私はアオに宣言した。

「私は時々、誰もいないところで話しかけてくれるだけでいいよ。」

アオはもつと皆と一緒にいるほうがいい。アオが友達といるときは、
私は話しかけない」

私は一生懸命に説得しているのにアオは近くにある木に登り始めた。

普段は不器用なくせに、変なことだけは得意だ。

「ソラも登ってみてよ。凄いよ」

「そんなことより私の話を聞いて」

「何、聴こえないよ？」

アオは随分な高さまで登ってしまっていた。

仕方が無く私も登ることにした。

木の上で枝に腰掛けてアオが私を呼んでいる。

アオ座る枝まで到着すると、アオが話しかけてくる。

「村が全部見えるよ、凄いだろ？」

「そんなこと知ってるよ。山に住んでいたんだから」

ここから見る村の景色を、私は知っていた。

何週間も、この山の上から眺め続けていたのだ。

それを眺めるのは、私が独りであることを確認するようで、嫌いだ
った。

けれど今はそれほど嫌な気分ではなかった。

アオは私の心が読めるように言葉を紡ぐ。

「二人で見ると、なんだか楽しい気がするよね」

でもアオはもっと別の人と見るべきなのだ。

「他の子達は、皆が一緒にいるから大丈夫だよ」

それではアオが可哀相だ。

「僕は、ソラもいるこの村が好きだよ」

アオの言いたいことは判っていた。

私はアオと繋がることでのみ、この村に加わることが出来るから。

子ども達の間でのことは、アオは納得しているようだった。

私はそれ以後、そのことに口を出さなかった。

けれど大人たちもアオのことは気味悪がっていた。

私はアオが影で鬼の子と呼ばれていることを知っていた。

きつとアオもそのことは判っていたのだろう。

それでもアオはいつも私の隣にいてくれた。

私はもうアオから離れることが出来なくなっていた。

アオが12歳の時、村を冷害が襲った。

作物は殆ど育たなかった。

それでも山の動物や、僅かに実った作物で村は存続できるという話
だった。

そして村の殆どの子どもが外に出て行くことになった。

奴婢として、都の近くで使われるためだという。

村全体で労働力の低い子どもたちを口減らしすることになったのだ。アオも当然、村を出ることになった。

私はアオと一緒にいこうとした。

けれど出立の日、村のはずれで私の歩みは止まった。

私は村から出ることが出来なかった。

アオは立ち止まる私に言った。

「やっぱりソラは神様なんだよ」

私は必死に否定した。

「私は神様じゃない。ソラだよ、アオと一緒にだよ。二人じゃないと、あの日の空じゃない！」

いつの間にか泣いていた。

そしてその涙をアオが拭っていた。

「あの日もこんな風に泣いていた」

「アオがいないとあの日までの私と同じだよ」

「ソラはここで村を護って。僕はきつと帰ってくるから。ソラが泣かないって言うてくれたら、僕は必ず帰ってくるから」

アオはその言葉を残して行ってしまった。

また私は一人ぼっちになった。

私は相変わらず山の中で村を見下ろしていた。

ソラは帰ってくると言った。

ソラは約束は破らない。

そんなことを呟き続けて私は何十年も待ち続けた。

けれどアオの母親が亡くなったとき、私は我慢が出来なくなった。アオもこんな風に死んでしまっているかもしれない。

そう思ったら本当の一人ぼっちになったような気がして泣いてしまった。

私は独り呟いた。

「ごめんねアオ。約束は守れなかったけど、私は貴方に会いたい」

私は村のはずれで外に出ようと試した。
無理に出ようとすると身体が裂けた。

前に進むたびに血が噴出した。

ほんの少し進むことも困難なほどに堅牢な壁があった。

私はあまりの痛みに、わんわん泣いた。

けれど外に出るのを諦めようとは思わなかった。

全身から出血しながら、一日1歩踏み出すのが精一杯だったけれど、
1歩ずつでもアオに近づいていると思うと我慢できた。

毎日泣きながらアオに一步ずつ近づいていった。

寝ることも休むこともなく、進み続けた。

そうして1年も経った頃、声がした。

「おまえ、何してるんだ？」

アオ以外の人間に声をかけられたことなど無かったから、私にかけられた声だとはじめは気づかなかった。

応えず、前に進み続ける私に声の主はまた問いかける。

「ここから進めないのか？なんで無理に進むんだ？」

ようやく声が私に向けられたものだと思えた。

「あなた、私が見えるの？」

そう言いながら振り向いて驚いた。

そこにいたのは天狗だった。

「ああ、見えるけど。お前ここの山神だろ？」

本当に見えているんだ、とか。

天狗って本当にいるんだ、とか。

私って本当に神様だったのか、とか。

色々考えていると、天狗はまた話しかけてくる。

「ここ何ヶ月かずっと見てただけ、なんだか必死だし、声かけ辛かったんだよ」

私はとりあえず質問に答える。

「アオに会いたい。だから山が出るの」

「会いたいヤツがいるんか。でもそんなんじゃ何十年かかるかわからんぞ」

そんなことはわかってる。それでも。

「それでも待つてるだけなんてできない。私が約束を破ったから、アオは帰ってこないから、私が会いに行かないとだめなの」

天狗は呆れたような顔をして言った。

「とりあえず必死なのはわかった。ちょっと休んで待つてる。すぐ出れるようにしてやるから。」

私は1年ぶりに休んだ。

あんまり久しぶりすぎて気を失ってしまった。

目が覚めると天狗が傍にいた。

「起きたか。もう出られると思うぞ」

私は半信半疑だった。

けれど確かに私を拒む壁はそこには無かった。

「どうして？」

天狗が答える。

「それは壁をなくした方法について聞いているのか？それともなんで俺がお前に協力したのか聞いているのか？前者ならこの村の神主の一族を皆殺しにして血を絶やしたから。後者はお前が好きになったから」

よく喋る天狗だった。

私が礼を言つと、礼なんかいらないと返された。

「礼の代わりに、俺も連れて行け」

私はまた独りではなくなつた。

私はすぐにアオに会うために旅立った。

道中、天狗はよく喋る。

その沢山の言葉が全て私に向けられたものだということが、たまらなく嬉しかった。

「天狗はさつき私を好きだって言ったけど、私も天狗が好きだよ。私は私のことが見えるだけでも嬉しい」

「お前な、俺は天狗って名前じゃない。サブローだ。サブちゃんと呼んでくれ」

サブは少し照れているようだった。

「私もオマエって名前じゃないよ。ソラだよ」

私は誇らしいその名前を口にした。

青空1（後書き）

タイトルはアオソラと読みます。

小説なら兎も角、この原液状態ではイマイチかもしれません。

青空2（前書き）

山でも谷でもない場面・・・

青空 2

「少しでも速く走れる方法ってないのかな？」

私の問いに応える声は上空から響いていた。

「そりゃあ、飛ぶのが速いだろ」

サブの言うことはむちゃくちゃだった。

私には羽根などない。

そういうサブは空を飛べるから簡単そうに言うのだ。

羨ましくなつてサブを見つめる。

「物欲しげな目で見るんじゃない」

そう言いながらもサブは地面に降り立つと、膝をついた。

「乗れ」

「サブ、大好き」

空を飛ぶ雲と並走しながら、私たちは都を目指した。

旅の何日目かに、私たちはふと気づく。

いつも同じくらいの大きさの雲が私たちと並走している。

少し離れた場所だったので、今までは気づかなかったのだが、いつ

たん気になりはじめると、それは雲というには不自然にも思えた。

私たちが木の上で休憩すると、その雲も動きを止める。

また飛び始めると、後をつけるように動き始める。

私とサブはその雲に近づいてみることにした。

すると今度は私たちから逃げるのである。

けれど雲のことばかりを気にかけてもいらなかった。

私はアオに少しでも早く会いたかったのだ。

私を乗せて飛んだのでサブはすぐに疲れてしまって、一日にいくらかも飛ぶことは出来なかった。

それでも歩くよりは遥かに距離が稼げた。

サブは疲れてしまうと歩くのも億劫だった。

それで一日に何時間か飛ぶと、あとは山中で野宿していた。

山の中でサブのための食物を探すのが私の仕事だった。

私は何も食べなくとも生きていくことが出来たが、サブには食事が必要なのだ。

その日も川魚を取るために川に入っていた。

私は魚を取るのが得意だった。

その手で魚を掴むまで魚は私の存在に気づくことが無い。

けれど、その必要もなくなった。

ある日、食物を求めて山を歩いていると、魚やら山菜、山芋などが山積みになっていた。

それは、毎日のように続いた。

気づけば食物が山積みで置かれているのだ。

私はいつも誰もいない場所に向かってお礼を言った。

何日目か、私は食物を置いていく者を見ることができた。
大きな猿だった。

私は猿を呼び止めようとした。

しかし、なんとやって呼び止めればいいのか。

「その人」、人ではない。

「その猿」、なんだか失礼な気がする。

いや猿と呼ぶことを失礼に思うのが失礼だろうか。

迷っている間にも、食物を積み終わると立ち去ろうとしてしまう。

私は咄嗟に声をかけた。

「そのな者、待たれい。常より食物を置き去りし者は、そなたであるが」

なんだか大仰な言い方になってしまった。

猿が立ち止まってくれたので、万事良しとしよう。

事情を聞くためにも、長く引き止めなくてはならない。

そこで私は提案した。

「一緒に食べない？」

サブは猿のことを直ぐに気に入った。

「いつそ仲間になれよ、この野郎」

この野郎なんて誘い方があるだろうか。

それなのに猿は涙ぐみながら、何度も礼を言っている。

「ずっと寂しかったんです。昔旅をした仲間と別れてから、ずっと独りで」

私は自らの想いを打ち明けられずにはいらなかった。

猿は私に共感し、一緒に旅を続けることを了承してくれた。

「孫悟空といいます」

猿が名乗るとサブが難色を示した。

私が理由を問うとわけのわからないことを言う。

「ソソってというのは縁起が悪いし、ゴクーってのは言いづらいじゃないか」

「齊天大聖って呼ぶ人もいますけど・・・」

「じゃあセイだ」

「私もセイのほう呼びやすい」

満場一致でセイと呼ばれることになった。

後から聞いた話だが、サブにも苗字があったらしい。

それがやはり言いづらい名だったのでサブローとしか名乗らなかったそう。

セイはやけに腰の低い男だった。

私たちは人間とは違い、それほど年齢に頓着しなかったが、それでも、セイの年齢が私たちよりも遥かに上であるのに、私たちに対して丁寧に語る様には違和感があった。

また、セイは親切的な男でもあった。

私たちはセイと出会って以後、彼の駆る雲に乗って移動した。

雲は速かった。サブよりも速かった。

そして疲れ知らずであった。

私たちは予定よりも遥かに早く都に近づいていった。

それでもセイは、得意になることはなかった。

彼は人が良いというより、小さな男であつたのだ。

セイは常に私たちに見捨てられはしないかと、不安に思っているようだった。

私はただ、私を見ることのできる存在が欲しかったのだから、セイを手放そうとする道理がなかった。

そのことを幾度も説いたが、彼は納得する様子が無かった。

サブは初めから、この件には全く頓着していなかった。

そのうち私は、サブの気楽さを見習うべきだと感じるようになった。つまりところ、私は常にセイを必要としている状況にあるのだから、彼が不安を訴える度にそのことを説いてやれば良いのだ。

私たちはそれから数ヶ月の旅で都の近くの村に辿りついた。

都の近くだけあつて、大きな村だった。

そして、その大きな村は燃えていた。

住民の声は殆どしない。

道には二度と声を出すことが出来なくなった人間が転がっていた。その中で、燃えた柱に向かつて腰を振り続ける男がいた。

そしてそれをみて笑う女がいる。

私は女に声をかけた。

「なにが可笑しいの？」

女は驚いたような顔をして私を見ている。

そしてセイが男を助けようとすると、それを止めた。

「その男は山賊の一味だ。放っておきな」

私にはわけがわからなかった。

「私が化かしたんだよ」

その言葉をサブが補足してくれた。

「あの女、狐だな」

燃え盛る柱と共に、男が炎の中に消えてゆく。

女は村の近くに住む狐だった。

村人から祀られていたが、祀る村人を殺されたので山賊を化かして皆殺しにしたのだ、と女は言った。

「祀る人がいなくなつて、これからどうするの？」

「これから残りの山賊を退治するのさ」

女の目は一寸先しか見えていないようだった。

私は女に着いて行こうと決意した。

サブもセイも同意してくれたが、女は渋る。

「あんたたち、知らないのかい？山に住んでいるのは、鬼だよ」

「山賊じゃないの？」

「山賊の頭が、鬼と呼ばれているんだ。頭の跡取りは、鬼の子なんて呼ばれてるみたいだがね」

私はその言葉を聞いて驚いた。

アオは昔、鬼の子と呼ばれていた。

もしかしたらアオのことかもしれない。

わずかな可能性ではあったが、私はすがった。

私がどうしても着いていくと言うと、女はセイとサブをちらりと見て、渋々同意した。

山賊の住処は血の海だった。

骸を曝す山賊と、侍の姿があつた。

そして生きている者は侍のみであつた。

討伐隊が山賊を全滅させたのだらうと判じた。

私は侍が引き上げた後、山賊の住む屋敷に入る。

死体を避けながら、徐々に奥へと進んでいく。

アオの遺体がその中に存在するのか、私は不安だった。

全ての死体には首が無かつた。

首は侍達が手柄の証に持ち去るのだとサブが教えてくれた。

全ての死体に首が無いことを確認しながら、奥へと辿りつく。

屋敷の奥にあつたのは鬼の死骸だつた。

身体は赤く、人間と思えないほど大きな身体だつた。

そして身体には、やはり首が無かつた。

鬼の死骸の下に折り重なるようにして存在する死体を、やはり首が無いのか確認するためにサブが引つ張り出す。

その人間には首があつた。

それは死体ではなかつた。

深く傷を負つてはいたが、確かに生きていた。

年齢を考えれば、確かにアオと同様であつたが、少年の頃のアオの面影は残つてはいない。

私は彼の身体を負ふつて屋敷を出た。

サブが手伝おうかと問うてきたが、私は断つた。

この重みは、今の私には希望の重みであつた。

私は彼がアオであることを、そして彼が助かることを祈つた。

青空2（後書き）

やはり一話で一区切りつく話作りでないと、やりづらいですね。

青空3（前書き）

ジャンル・選べなかった者たちに贈るADV

価格・¥8,800円（税込¥9,240円）

OS・WinXP / Vista / 7 1日本語版

青空3

目を覚ました山賊は私の姿が見えなかった。

ただサブとセイの姿だけが見えていたようだった。

そして、彼らを見ても驚いた様子が無かった。

鬼の部下をやっていたのだから当然ともいえる。

山賊に私の姿が見えなかった以上、彼を殺すと狐は言った。

狐は私がアオを探している事情を全て聞いた後、山賊がアオであつたら、殺すことを思いとどまってくれと約束してくれた。

山賊が私を見ることが出来ないと言うことは、彼がアオではないことを示している。

しかし私は彼がアオなのではないかという疑念を払拭できてはいなかった。

これは全く簡単に解消されうる疑念であった。

名を尋ねればそれで済むことだからである。

私はサブに頼んで名を聞きだしてもらった。

彼は名乗った。

俺は青鬼だ、と。

私は彼と暮らすうちに、確かに彼がアオであると確信していた。

相変わらず、私の姿は見えず、私の声を聞くことは出来なかったが、食事の仕方や、話し方にはアオの少年時代のアオの面影が残っていた。

彼がアオであったと報告した後も、サブも、セイも、そして狐までもが私と共に暮らしていた。

狐の名を聞いた途端、サブは呼びにくいと断じ、勝手にゴンと呼び始めた。

私もセイも初めは彼女の本名を呼んでいたのだが、彼女自身がゴンでいいと言い出すので、すっかりゴンで定着してしまった。

ゴンは人懐こい狐だった。（私は人ではなかったが）

村を襲った山賊を皆殺しにした、あの冷徹なゴンと、私に擦り寄り甘えかかるゴンは、どう考えても一致しなかった。

私たちの前での彼女は粗方、この人懐こい悪戯狐だった。

彼女が人里で食物を騙し取るので、毎夜豪勢な食事が並んだ。

アオに栄養のあるものを食べさせたかった私には嬉しかったが、ゴンはそのことを快く思ってはおらず、私が食事を取らずに全てアオに差し出していることを知った後には、盗ってくる物が萎びた芋だの腐りかけの魚だのになっしまい、アオではなくサブの方が不平を言う始末だった。

それを美味しいと涙を浮かべながら頬張っていたセイは、翌日腹を下してしまったので、あれはセイのお世辞だったのだらうと判じられた。

結局、食料は私とセイが集めることになり、一日ならだらとしているサブをゴンが叱り付けるのが、ここでの常の風景であった。

私たちは、屋内に住む習慣が無かったが、山の中に小さな小屋を作りアオだけはそこに住まわせた。

アオは毎日、ただ呆けていた。

私が話しかけても、当然応えることはない。

ただ、一度だけ独り言を呟いたことがある。

「何で俺を助けたんだ」

私の言葉をサブがアオに伝えてくれる。

「お前の知り合いに頼まれたんだ」

私は友人だ、とサブに言い直してもらおうとしたが、アオはそれきり俯いたままで、私たちに何かを聞きたいようには思えなかった。

アオはこんな有様だったが、私は少なからず満足していた。

皆がいて、アオがいて、ただ独り過ごしたあの山の上とは比べ物にならないほど、ここは居心地が良かった。

たとえば、アオに私の姿が見えていなかったとしても、私が彼の傍に

いらただけで満足していた。
結局、私は何も伝えられないまま時が過ぎ、アオは私たちの前から姿を消した。

アオは普段眠っている寝所から突然姿を消した。
彼が行ったことに気づいたのはゴンだった。
彼女の聴力は、彼が立ち去る物音を聞いていた。

ゴンははじめ、私たちに事実を報告する気など無かったそうだが、アオを憎しみつつも、私たちに対する気遣いから、アオが立ち去った数時間後にそれを報告した。

私は当然、アオを追った。

アオの行方はゴンの嗅覚が頼りだった。

私にアオの失踪を報告することをはかった彼女が、本当にアオの行方を追ってくれるのか不安な気持ちもあったが、それ以上に頼るべきものがなかった。

アオを追っていくうちに、市街地へと近づいてゆく。

「鬼の子だから、また人間を襲っているんだ」

ゴンはアオに対して疑念を抱いていた。

私はアオが山賊の一味として、人間を襲っていたということが信じられなかった。

鬼の屋敷にいたのは、何かの間違いではないかと思っていた。

そうして考えることを止めていたのだが、やはりゴンの言うとおり、アオは山賊の仲間だったのだろうか。

だとしたらどうしてなのだろう。

彼が村を出てからの顛末を知りたいと思った。

考えている内に、市街地に入り、その一角から火の手が上がっていることに気がつく。

燃えている屋敷の中で、アオは侍の刃を腹に受け、蹲っていた。

私にはアオしか見えていなかった。

侍の群れの中に飛び込んでゆく私は、酷く危なかしい存在だったろう。

それでも侍達は私に気がついた風はなかった。

やはり彼らには私は見えていないのだろう。

アオを抱きかかえたとき、彼と目があつた気がした。

彼はただ私を見て、「ああそうか」と全て判じたような顔をした。

私は何度も彼に呼びかける。

それが聴こえているのか、いないのか、彼は独白にも似た言葉を紡ぐ。

「親父がな、俺を助けたんだ」

アオの言っているのはあの大鬼のことだろう。

「いつもは、心の深まで鬼のように思ってたんだ。それが、なんで助けたりするんだろうな」

あのときアオが鬼の下で生きながらえたのは、ただ偶然ばかりではないことが私にも伝わってきた。

「親父は、最後に、お前に会えて言っただんだ。親父と出会ったときに、俺があのだ獄みたいな労役から逃げてきたときに、俺が言っただけを、忘れてなかったんだ。俺はすっかり忘れてた。馬鹿みたいだな」

誰に向けられた言葉であつたのだろう。

「ソラに会いたい。俺にはただ、そればかりだったんだ」

私は必死に呼びかけた。そして祈った。最後のこのときばかりでも、彼に私の姿が見えていて欲しい。

そして彼は最後の時に空を掴んだ。

「お前は鬼の娘か」

その言葉は、確かに聞こえはしたが、私の心とそれに追従する身体は反応しなかった。

私はただ、アオが死んだことばかりが悲しくて、他のなにものも私を動かすことはなかった。

少なくとも、この時までにはそう思っていたのだ。

ただアオを掻き抱いた私の上に、赤黒い液体が降り注いだのを見て、私は何も思わなかった。

けれど、その数瞬後に、地面に転がったゴンを見て、私ははつと気がついた。

振り返るとセイが侍の刃を、受けていた。

そして次の瞬間には、私の身体はふわりと浮いていた。

私を抱いて逃げるのはサブだった。

そうして逃げるうちに、サブの身体から、まだ温かい血が私の顔に滴り落ちた。

このとき、ようやく私は判じた。

彼らは私を助けようとして、それで傷ついているのだ。

私はきつと自分のことばかりしか考えてはいなかった。

アオに会いたいという自分の心ばかりしか、大事には思っていないなかつたのだ。

私はサブに待つてくれるように頼んだ。

ゴンとセイを助けなさいと、心から思った。

けれどサブは止まってはくれなかつた。

ただ一言、「あいつらも俺も、選んだだけだ」と私に言った。

私はサブに謝った。

そうして自分の思いばかりしか考えてはいなかつた自分を恥じた。

サブは都からよほど離れた山の上で翼を休めた。

少なくとも本人は翼を休めるためだと言った。

けれど、どの様子はそればかりではなかつた。

もうすぐ、サブはこの身体で飛ぶことが叶わなくなるように私には判じられた。

サブは泣いて詫びるばかりの私の頬を撫でて、謝ることはないと慰めた。

「みんな、お前と同じだ。みんな自分の心のおもつとおりに行動し

た果てのことだ。誰もお前には謝って欲しいとは思っていない」
そうであったとすれば、なおのこと私は詫びなべならないのだと思
った。

私を自分の命よりも大事と考えてくれた者に、この結果を与えたの
は私なのだ。

私は詫びるより他、彼らに報いる術をしらなかった。
そうして詫びる私にサブが最後の言葉をくれた。

「詫びるくらいなら、次は選んでくれ。あいつらみたいに、お前も
選んでくれ。お前がそうして迷ううちは、俺たちは報われはしない
ただそれだけで、俺たちは気持ち良く死ねるんだ」

あとに発せられた音は、言葉になってはいなかった。

最後までサブは喋り続けた。

彼は死ぬまで饒舌であった。

はじめの100年、私はただ泣き続けた。

それは、私が生まれた山の上で流した、独りに震える涙ではなかつ
た。

私がなにひとつ選べなかった所為で、ただ漫然と死んでいった彼ら
を想って流す涙であった。

アオは私に会いたかったのだ。

その気持ちを汲みもせず、ただ傍にいられたことだけで満足してい
た私は大馬鹿者だ。

結局、私は皆がいるあの生活に自分の心を満足させて、何者も選ば
ず、ただ漫然と生きていただけだった。

そのくせ、アオが危地に陥ると、仲間の危険を顧みずにひとり飛び
込んでゆき、皆まで死に追いやった。

そうして私の傍にいた者たちにまで報いることが出来なかった。

私が欲しかったものは何なのだろう。

彼らのように、自らの命を対価として、なにかひとつ守ろうとする
ならば、それは何だろう。

ただ傍に居るだけで満足だと思える、恋しい相手なのだろうか。共に語らい、共に生きてくれる友だろうか。

私は自分の心に問いかけ続けた。けれど何百年と考え続けても答えは出そうになかった。

次第に私の身体は自分の目にも判るほどに透けていくようになった。それは数百年の時をかけて、私の身におこった変化だった。

これが進化であるのか、退化であるのか、もしくは衰えであったのかはわからない。

きっと自分の目にすら映らない、大気の一部になってこの世界を漂い続けるのかもしれない。

選べなかった者に対する、これは報いだろうか。

それでもこの身体が、あの青空に融けてゆくのであれば、私は満足な心地がした。

独り泣いたあの頃の瞳に映った空に。

アオと見たあの空に。

サブがいて、セイがいて、ゴンと一緒に翔まわった空に。

私が何と思い悩んでも、きっと空は同じ色をしていたのだ。

今は私と同じ空に、この身体が融けて行く。

青空3（後書き）

この話の次に「オゾンの子ども」という話をやって終わりですが、
なんというか、タイトルでオチがバレバレな感がありますね。
とりあえず小説化希望なので、暇で技術のある方で面白いと思って
もらったならばよろしくお願いします。

オゾンの子ども1（前書き）

ラストスパートです。

個人的に日常に異常が存在するという設定はやけに書きやすいので、かなり楽でした。

オソンの子ども1

僕は下等な生物に囲まれて暮らしています。

連中が僕のことを同族として扱うことが我慢ありませんでした。

やつらは僕と暮らし、僕と共に勉強をし、僕にものを教え、僕と同じものを着て、僕を遊びに誘い、僕に食事を勧めます。

それら全ての扱いを、不当なものであると僕は感じていました。

連中は明らかに、僕と同じ世界を共有してはならない、寧ろ僕に支配され、管理され、利用されるべき存在なのです。

それらの存在と同族として扱われることは、許されざる冒涇であると、そう感じるものが僕にとっては明らかな自然でした。

そして何よりも堪忍ならないのは、僕があの下等な生き物から産み落とされたということなのです。

僕はいつしか連中を、存在すら許容できないほどに憎みきっていました。

やつらのことを、下等な存在だと考えていた訳ではありません。

下等な存在であると感じていたのです。

この矛盾は、僕を常に悩ませていました。

僕は自分のことをそれほど上等な存在とは考えてはいませんでした。考えれば考えるほど、僕は連中と同等の存在でした。

けれど、こういった神経の作用か、感情がそれに従いはしないのです。

僕が連中を下等であると感じるようになったのは、なにも生まれた時からの常ではありません。

それなりに普通の幼少期を過ごしてきました。

無力な自分は、両親の愛に囲まれて過ごす、ありふれた子どもでしかなかったのです。

初めて連中を下等と感じたのは、7歳の夏でした。

母に連れられていった百貨店の屋上で、ソフトクリームをねだり、母は「しょうがないね」と言いながらも少し嬉しそうに僕に今買ったばかりのソレを手渡しました。

そのとき、僕は自分を酷く恥じました。

僕は母に菓子をねだるといふ、ただ其れだけの行為が、その子どもらしい行為が、あまりにも恥ずべきことと感じたのです。

僕は母の手を払いのけました。

地面に転がったソフトクリームを見て、母は僕を叱りました。

常の僕であれば、母に謝ったに違いありません。

それは悪いことをしたという感情と、怒った母に対する恐れ感情。その双方に突き動かされ、母に謝ったことでしょう。

けれど、実際に僕の中で膨らんだ感情は怒りでした。

母の僕に対する驕りを許せないという気持ちでした。

反発する僕を見て自己の教育に不安を感じたのであろう母は、その

日帰ってから父に僕を叱るようにと嘆願しました。

そうして父もそれに肯くところがあつたと見えて、その晩僕は父からお叱りを受けることになりました。

それでも何一つ反省の色を見せない僕に対して、父は鉄拳を振るいもしました。

僕は必死に抵抗しましたが、所詮は子どものもので、大人に敵うはずもなく、僕は父に組み伏せられ、酷く殴られました。

僕は殴られながら泣きました。

父は僕の涙を、僕に対して権威を示せた結果であると解釈し、散々にお説教を施した後、僕を部屋に引き取らせました。

けれど僕の涙の意味は、父の解釈とは大いに違いました。

僕の涙は、自分に対する情けなさの涙でした。

下等な生き物に、いいようにされる、哀れな自分に対する涙でもありました。

僕が部屋で泣いていると、母がやってきて僕を慰めました。

「父さんだって、あんたが嫌いで殴るんじゃないのよ」

「懲りたなら、いい子でいなさいね」

そうやって母は僕を優しく抱くのです。

その行為で僕はもつと激しく泣きました。

僕の有様を見て母は満足して部屋を出て行きました。

母の取った行為の全てが僕にとって腹立たしいものでした。

両親は僕を舐めきっているのです。

僕を掌の上で操っている気です。

そのことがこの上も無く憎く感ぜられました。

僕は散々に泣いた後、部屋で独り考えました。

急に訪れた感情の波に、思考が追いついていなかった先ほどの自分を顧みて、また、この感情に折り合いをつける術について考えていました。

思考の果てに、僕は自分が決して彼らよりも上等な存在ではないことに気づき、感情と思考の間で矛盾があることに気がつきました。

そして、この差を埋めることは幾日経っても叶いませんでした。

それもそのはずで、僕を悩ませていることの全ては未だ根幹にこの問題が関わっているのです。今の自分でも判じないことを当時の自分に知る術はあろうはずがありませんでした。

そうして一月も経った頃、僕は両親や友人や教師達にとって、相当の問題児になっていました。

しかし、この1ヶ月は、僕が存在が貶められ、僕が連中を貶めるだけに終始したわけではありませんでした。

僕は自分の行動が、あまりにも愚直に過ぎたのではないかという、生き方についての真理へと思い当たりました。

この世界では、思いどおりに行動すればするほど、僕は下等な生き物達から、より強力に貶められ続けるということを知りました。

そう判じた日から以後、僕は人目にはひたすら優等生に映るよう、自分を見せ続けました。

その日からの僕の人生は演技でした。

如何に連中を騙し、世界にとって正常な存在であり続けるか、其れだけを考え続けて日々を生きていました。そうしなければ、僕には日常を耐えられそうにありませんでした。彼らを騙しきつているという自信だけが、その時の僕の神経を平静に保つ唯一の術でした。

そんな僕が、心の平穏を保つ拠り所を求めるにあたって、新たな存在が見つかる日がきました。

それは読書でした。

はじめ僕は、連中が書いた物語などを読むことが苦痛でなりませんでした。

けれど逆にいえば、その点に目をつぶれば、これほど有り難い存在は、僕にとつては無かつたのです。

これらの物語は、連中が成りたくても成れない、上等な存在を思い描いて書かれたものであると、僕は自分に言い聞かせることに成功しました。

それから後は、物語の世界が僕の平穏でした。

物語の登場人物だけは、僕と同等の存在であり続けました。

無論、歴史物やドキュメンタリー作品は読むことが出来ません。

完全なフィクション作品。

とりわけ、下等な存在が作り出した、この世界をベースにした作品などではなく、完全に創作された世界観である、ファンタジー作品を好みました。

また、この世界が破壊されて後の世界を描いた、SF作品なども僕の好みでありました。

僕は物語を読むことに夢中になりました。

物語の世界に没頭している間は、僕は孤独ではありませんでした。

そう、僕の日常は孤独だったのです。

僕は猿の惑星に放り出された異星人だったのです。

母星に帰る術のない、この世界に存在し続けるより他ない、あまり

にも哀れな存在が僕でした。

僕は物語の登場人物に語りかけます。

「君達の世界は平和なのかい？」

それに応じる声があります。

「この世界の平和は魔王に脅かされているのだ。私たちは共に立ち上がり、いつの日か魔王を打ち倒さねばならない」

僕はその声を羨みます。

彼らの世界には打ち倒し、平和を手にする術が、確かに存在していました。

その点で、彼らは平静を保ちえたのです。

また僕は問いかけます。

「君達の世界は平和なのかい？」

それに応じる声があります。

「私たちの世界では自我などというものを感ずる必要が無いのだ。ただ、システムに管理され、生きることを強要されるばかりで、生の充実などありはしない。平和を望む心すら持つ必要が無いのだ」僕はその声を羨みます。

絶対的存在に支配されることは、今の僕には望みこそすれ、忌避すべき事柄ではありませんでした。

システムを神と呼び尊敬することができる点で、彼らは幸福でありました。

僕を支配しているものは、大多数の下等生物が作り出した社会なのです。

そのことに、ひたすら屈辱を覚えることは、僕だけがこの世界で持つ苦悩でした。

彼らには彼らの苦悩があり、それは僕にとって想像することしかできないものでしたが、きつと彼らにとっても僕の悩みは体感する術を持たないものです。

僕は彼らと同じで、立ち向かうべき強大な敵がいることに、共感を

覚え、励まされもしました。

新たな心の拠り所を見つけたその日から、何年か経った日のことです。

その日も僕は読書していました。

いつもどおり、図書室に居座り、物語の登場人物と対話していました。

がしゃんという大きな物音に驚き顔をあげた僕の眼に、ガラス片が飛び込みました。

それは野球部の練習中に、部員のグローブを大きくそれで、図書室の窓ガラスに当たったボールが作り出した、透明な刃でした。

それが僕の眼が最後に見たものの正体でした。

僕は対等に付き合える人間を無くしました。

病室のベッドで、僕にひたすら頭を下げているであろう、下等生物の謝罪の声を聞いても、僕は怒りを覚えることはありませんでした。僕は怒りよりも絶望を感じていました。

これからどうやって平静を保てばよいのか、僕は途方に暮れました。何十年も、僕は下等生物だけに囲まれて過ごし続けなければならぬのです。

連中の声にすら、僕には憎しみを抱いていました。

見えなければそれで良いということではないのです。

存在そのものを感じるたび、僕は自己の悲惨な運命に向き合わねばならないのです。

僕は暗い部屋の中に籠もるようになりました。

もしかすると部屋の中は明るかったのかもしれませんが、僕の眼は、もう光を感じ取ることが出来ませんでした。

いつしか闇の中で僕は手を伸ばしていました。

たとえどれほど手を伸ばしたとしても、あの日の青空を望むことはできない。

オソンの子ども2（前書き）

むちゃくちゃ長くなりました。

凄まじくバランスが悪いですね。

アオが黒すぎて、書いてる本人も笑ってしまいました。

オソンの子ども2

何故だか判りませんでした。

確かに僕はそのとき「あの日の青空」を思い浮かべました。

あの日というのが何時の事なのか、僕には判りません。

そのときの僕には、ただ何かを思い出しかけている感覚だけが残っていました。

そしてその感覚は、日を追うごとに強まっています。

頭の片隅に引掛かっているものに、少しづつ近づいてゆくのが、はつきりとわかるのです。

光を失ったときから、僕は毎日のように、その感覚と向き合っていました。

しかし感覚を追っていたばかりに、僕が頭の片隅から引張り出すことが出来たのは、やはり感覚だけでした。

僕が今抱えている苦悩と、僕はもっと以前から向き合っています。

そして、過去の僕は、何者かによって確かに救われたのです。

嬉しさと、温かさと、悲しみとが混在になっている、そんな感覚だけがはつきりと思い出されるのです。

その感覚の正体が判ったのは夢の中でのことでした。

僕は山の中の小さな村に生まれました。

長い間、子どもが出来なかった夫婦の間に、期待されて続けてようやく生まれてきたのが僕です。

アオと名づけられた僕は、両親の愛を惜しみなく注がれて育ちました。

村の他の子ども達より、よほど手間をかけられていました。

けれども、当時の僕もやはり例の苦悩を抱えていました。

両親も、村の住民も、他の子ども達も、自分より下等な生き物であ

ると、僕は感じていました。

そうして、その感情を隠して、演技を続けていました。
なにひとつ救いの無い、苦しみの日々でした。

そのときの僕は、文字を読むことなど出来ませんでした。

僕だけではなく、村に住まう者の殆どが文盲だったのです。

そしてそれが当たり前のことでした。

僕は物語の中の登場人物と対話することすら出来なかったのです。
僕の苛立ちは募るばかりでした。

その日、僕は母と共に山菜を取るために山に登っていました。

普段であれば、山には独りで入ります。

他の子ども達に誘われれば、快く引き受ける僕でしたが、自分から
誘うことはありません。

僕は両親からだけではなく、村の子ども達からも好かれていました。
理由は定かではありませんが、子ども達は僕と共に行動することを
好んでいたことだけは判っていました。

そして僕は友人面で近づいてくる、小型の下等生物に、心の中では
冷やかな視線を送っていたのです。

僕は誰とも共にありたいとは思えません。

対等のつもりで傍に居られることを嫌っていました。

けれどもその反面、僕は確かに対等に付き合える人間関係を欲して
いました。

母と共に山に入ったのには理由があります。

その日、僕は母を殺そうと考えていました。

保護者面をして僕に近づくこの生き物を、僕はどうしようもなく憎
んでいました。

彼女が僕を大事にすれば大事にするほど、僕の憎しみは増します。

そして僕の精神は限界に達していました。

僕はついにその日、狂ってしまったのです。

もしかしたら初めから狂っていたのかもしれませんが

僕の存在そのものが、世界にとっては狂気であつたのかもしれない。

けれど、少なくとも僕自身は、その日まで平静を保っていました。

僕の思考は、その日まで自分を客観視することが出来ていたのです。間違つた感覚を持つてはいましたが、正しい思考も働いていました。けれど僕の感覚は、段々と版図を広げ、ついには思考すら支配しようとしていました。その日の僕にとって、間違っているのは世界であつて、僕ではありませんでした。

山の奥深くまで母を誘つつもりでした。

僕の両目は、木々の奥にある仄暗い部分をじつと見つめています。

そのとき、山の暗い部分に俄かに光が差ししました。

その光は木の後ろに半ば隠れるような格好で、す、すと僕に向かって移動して、僕から一番近いところにある木の後ろでじつと止まりました。

僕は不思議な気持ちになりました。

先刻までの僕の殺気が薄らいでいくのを感じます。

柔らかな、靄のような光に、僕は近づいていきました。

けれど僕がその正体を見た途端、光は消えてしまいました。

そこには少女がいました。

僕はこの少女を見たことはありません。

小さな村の中で、把握していない人間などない筈だというのに、確かにその少女と僕とは初対面でした。

間違いようがありません。

この少女が僕と知り合っているはずがないのです。

もし知り合っていたとすれば、僕は今日、母を殺すつもりで山に登るようなことには成らなかつたでしょう。

その少女は、僕と対等な存在でした。

僕は少女の正体を探ろうとしました。

「お姉さん、誰？」

少女は答えようとはしません。

なんと答えるべきか、迷っているような仕草を示しています。

そうして仕舞いには泣き出しました。

僕は激しく狼狽しました。

彼女を泣かせるつもりなどなかったのです。

何か拙い言い方をしてしまったのだろうか。

悪気が無いことを示さなければならない。

僕は考えを巡らせた末に、純粋な子どもを装いました。

「なんで泣いてるの？」

彼女は指摘されてはじめて気がついた顔をして、あわてた様子で涙を拭くと僕に笑顔を見せます。

僕はその顔を見たときに、今まで味わったことの無い喜びに身を震わせました。それほど彼女の笑顔は純粋な美しさを持っていた。

僕は少女の正体なんて、もうどうでもよくなりました。

「ねえ、山菜ならあそこにも沢山生えているよ」

そう少女に言われたときも、山菜の事などどうでも良かったのです。それでも少女の厚意を喜ぶ子どもを演じるために、僕は喜んでみせました。

それは常の僕が悶着を避けるためにみせる演技とは訳が違います。

僕は彼女に好かれるためだけに、演技をしているのです。

普通の人間が、他人から好かれたいが為にする演技。

このときの僕は、確かに正常な人間だったのです。

「ねえお母さん！こんなに沢山あったよ！あのお姉さんが教えてくれたんだ」

僕がこう言えば、きっと母は少女に礼を言うでしょう。

確かな計算の元に、僕は母に事実を報告しました。

母も僕も彼女に感謝をしていると、僕は示したかったです。そのときの僕にとって、母は彼女に好かれるための道具でした。けれど道具は故障していました。

母は僕の指し示す方を見ても彼女に気づきません。

「誰もいないじゃないの」

彼女が母の目の前に近づいても、気がつくことはありません。

僕は苛立ちました。使えない道具だと憤慨しました。

「ねえお母さんには見えないの？」

僕は困惑していました。

それ以上に怒りを覚えていました。

けれども、そんな様を彼女に見られれば、嫌われるかもしれない。

僕は困惑の感情だけを表に出します。

そんな僕に母は言いました。

「あんたには山の神様が見えてるのかもしれないね」

僕は少し納得しました。

確かに、僕の感覚は間違っただけではなかったと考えました。

この下等生物では、山神様を見ることはできないのでしょうか。

僕は確信しました。

間違っていたのは僕の感覚ではない。

僕の思考だったのだ、と。

そして今までの葛藤が、急に馬鹿馬鹿しくなりました。

僕は山神様に声をかけようと思いました。

せめて僕だけでも、礼を示そうと考えたのです。

けれど彼女は急に僕の前から走り去りました。

僕は彼女を追いかけようと思いました。

すると母は僕を捕まえて言い放ったのです。

「仕事を放棄するな」

僕は母を初めて殴りました。

母のせいで、僕は彼女を見失ってしまったのです。

下等生物の分際で、僕の行動を阻害したのです。

僕はその怒りを正当なものだと確信していました。

しかし母は僕を強かに殴りつけると、家に連れ帰りました。

そうして、僕はその晩、父に折檻されました。

普段の僕であれば、悔しさのあまり泣き出していたでしょう。

けれど、父から殴られながら、僕はずっと少女のことを考えていました。

明日、もう一度山に行ってみよう。

山神様なのだから、きっと山に行けば会えるはずだ。

反省の色が見えない僕を、父は納屋に放り込みました。

僕はその晩、納屋の中で明日のことを思い浮かべて容易に眠ることが出来ませんでした。

翌朝、差し込む朝日の光量が増す様を眺めながら僕は、閉ざされた納屋の戸が父の手によって開かれるのを心待ちにしていました。

そして戸が開けられると同時に納屋を飛び出します。

僕はまっすぐに山をめざす途中、村の中心を貫く川に、ただ一本かけられた橋の上で立ち止まりました。

探し求めたものを、そこに見出したのです。

山神様は橋の上に居ました。

俯いて泣いている少女は僕が見間違えるはずの無い存在です。

そして僕には彼女が涙を流す訳が判りませんでした。

昨日、山の上で別れてから、彼女の身に何かあったのでしょうか。

僕は意を決して山神様に声をかけました。

「山神様、なんで泣いているの？」

山神様は僕の姿を見ると驚いた様子でした。

僕が更に言葉を選んでいると、山神様は僕を抱きました。

今度は僕のほうが驚く番でした。

僕は山神様の腕に抱かれて、狼狽すると同時に、暖かく、優しく、とても良い心地になりました。

母に抱かれたときですら、不快な感情しか持たなかった僕にとって、それは新鮮な気持ちでした。

それは僕が人生の中で味わったことのない感情でした。

山神様は僕以外の誰にも見る事が出来ないということを、僕は彼女の口から聞きました。

そして彼女も僕と同じように、孤独に苦しんでいるということを知ります。

彼女の苦しみが、僕にはよく判りました。

自分と言う存在が世界にとって異物なのではないかと彼女は言います。

それは幾度となく僕を苦しめた悩みでもあります。

けれど、そのときの僕は彼女によって自分の存在が肯定されたのだという喜びの中にありました。

僕はその喜びを彼女にも分け与えたいと思いました。

だから僕は彼女に告げたのです。

「僕という存在が、君にとっての世界なんだ。こうして僕と話しているということが、君が世界にとって正常であるという証なんだよ、山神様」

この言葉は、僕自身に向けた言葉でもありました。

それから、僕は山神様と毎日会いました。

僕自身がそれを望みました。

彼女は僕にとっての社会です。

僕が唯一、真っ当に生きうる社会なのです。

それまでの僕は、少なくとも僕自身が感じる部分では、社会に参画してはいなかったのです。

僕は彼女の存在を失くすわけにはいきませんでした。

ですから、僕は彼女を縛ろうと思いました。

僕だけが必要とを感じるように仕向けようと思ったのです。

そのひとつが名前でした。

彼女には名前がありませんでした。

僕は彼女を山神様だと考えていたので、彼女のことを山神様と呼びましたが、彼女はそれを否定し、そう呼ばれることを嫌いました。僕は彼女に名を与えることを提案します。

彼女が提案を受け入れたとき、僕は内心でほくそ笑みました。名は最も簡単に示しうる、存在の証明です。

それを与えられることで、自分が存在していることを当然と感じるようになります。

そして、与えた者は、自身を存在せしめた者として、自分を永遠に縛るようになります。

それゆえに、僕はこの名前が嫌いでした。

あの下等生物から与えられたという事実が許せませんでした。

自分のアイデンティティの重要な要素が下等生物に与えられたという事実が許せませんでした。

僕が歪んだ存在であるからこそ、僕は名が持つ力の強さと言うものを誰よりも深く感じていました。

そして僕は自身の名を新たに創りだそうと考えました。

「僕がアオだから、君はソラだよ」

思いつきのように放ったこの言葉は、深い意味を持っていました。この名は二人でひとつの名詞を構成しているのです。

この世界は、僕と彼女だけで構成された存在だという意味。

そして僕自身の名を、彼女の名前によって意味づけされたということ。

アオと言う名は、ソラという存在によって意味を成すのです。

僕は自身の名を新たに得た気持ちになりました。

そして、彼女は名乗るたびに僕をの存在を思い出すでしょう。

晴れた空を見るたびに思い出すでしょう。

僕の与えた名を、彼女は喜んで受け入れました。

この後も、僕は紡ぐ言葉の端々でソラには僕だけしかないのだと刷り込み続けました。

村の子ども達と山に山菜を取りに行った時のことです。

村の子どもなど、どうでも良かった僕は、ソラとずっと話し続けていました。

僕はソラと話するとき、とても気を遣います。

言葉ひとつにも、ソラを縛るための要素をちりばめ、それでいて彼女に嫌われないように、細心の注意を払っていました。

そうすると、おのずと作業は滞りがちになります。

ソラは僕の籠に、山菜を入れていきます。

僕の尻拭いをして、少しも嫌な顔を見せない優しい娘でした。

そんな中、村の娘が僕に声をかけます。

「ねえアオ、誰と話してるの？」

普段は疎ましいと感じる下等生物との会話でしたが、このときの僕はそれを利用することを思いついていました。

「山の神様だよ。見えないの？」

当然、見えないことは判っていました。

ソラは自身が僕以外の人間と関わりを持つことが出来ないのだと、彼女に感じさせるために、僕は空惚けた言い方をしたのです。

娘は何か言いかけたようでしたが、結局口には出さずに、その場を去りました。

それからしばらくすると、またも声をかけられました。

話しかけてきたのは、村の子どもの中でも最も滑稽なうすらでかい下等生物でした。

僕がやつの何を滑稽と感じるのか。

やつは下等生物の分際で僕とガキ大将の地位を争っている気でいました。

僕にいつも食って掛かるのです。

けれど口喧嘩以上に事を大きくする気がまるで無いのです。

そして必ず言い負かされて悔し涙を流しました。

やつは自身が僕よりも下等であるということを理解している貴重な存在でした。

僕に怯え、得意とする暴力という手段を使えないでいるのです。

そのやり場の無い怒りを、村の他の子どもで解消していました。

僕と口論をした後は、いつも影で村の子ども達が殴られていました。その様をみて、僕は愉快的な気持ちになりました。

やつの存在は僕にとって道化でした。

そのときも、やはりやつは僕に食って掛かりました。

「神様が見えるなんて、嘘つきだ」

僕はやはりソラに対して僕の貴重さを強調させるために言葉を選びます。

「君に見えなくても、僕には見える。それでいいじゃない」

このときはそれだけで済んだのですが、問題が起こったとすれば、その後のことでした。

「私は時々、誰もいないところで話しかけてくれるだけでいいよ。

アオはもつと皆と一緒にいるほうがいい。アオが友達といるときは、

私は話しかけない」

作業後、ソラは僕にこういいました。

それでは僕が困るのです。

僕がソラとの対話が必要としているのです。

ソラの言葉は、僕を氣遣つてのことだったのでしょう。

けれど、僕にとって下等生物と話すことは、苦痛以外の何者でも無いのです。

ソラと話すことで、ようやく耐えていられるのです。

兎に角、ソラを説得しなければなりません。

僕は傍にあった木に登り始めました。

考える時間を必要としていたのです。

無言で登るのも妙な気がするので、ソラを誘ってみました。

「ソラも登ってみてよ。凄いよ」

けれどソラは取り付く島もありません。

「そんなことより私の話を聞いて」

「何、聴こえないよ？」

僕は聴こえないふりで誤魔化します。

ソラは仕方がないという風で、木に登り始めました。

僕はその間に、考えを纏めます。

ソラがいくら僕を気遣ったとしても、彼女自身は、これまでの対話で僕の必要性を痛いほど感じているはずです。

僕が彼女と居たいと言えば、ソラの感情は反対することなど出来なくなっているでしょう。

登りおえて、僕の隣で息を整えるソラに対し、その点を重点において説得を試みました。

「村が全部見えるよ、凄いだろ？」

「そんなこと知ってるよ。山に住んでいたんだから」

独りで見る景色と、ソラと見る景色は大いに違いました。

きっとソラも同じ気持ちでいるに違いないのです。

「二人で見ると、なんだか楽しい気がするよね」

ここで少し間を空けます。

「他の子達は、皆が一緒にいるから大丈夫だよ」

というより、僕には他の子どもなどどうでも良いことでした。

「僕は、ソラもいるこの村が好きだよ」

そう、この村にソラが参画する手段は、僕しかないのです。

その点を、今日まで何度も復習させてきました。

ソラは僕と共に村に参画しているつもりでいるはずですが、

その実、僕は村と繋がってないませんでした。

僕もソラも、この世界から切り離された存在なのです。

そして二人の間には新たな世界が存在していました。

この世界だけが、僕の日常でした。

ソラはそれきり黙りこんでしまいました。

彼女は既に僕から離れることなど出来ないのです。

そう感じ、僕は満足しました。

僕が12歳の時、村を冷害が襲いました。

その結果、村の存続のため、子ども達が売られていくことになりました。

大して労働力になりえない子どもは、飢饉の際には間引きされるか、売られることは当時の常識でした。

僕も当然、村を出ることになりました。

この際、ソラが僕についてくることは判っていました。

ソラと出会ってからの日々は、こんなこともあるうかと、彼女を縛り続けた数年間だったのです。

僕はソラと共に村を出立しました。

そして恐れていた事態がおこりました。

村の外れまで来たところで、ソラが立ち止まったのです。

僕は彼女が山神様であると未だに考えていました。

彼女がこの土地に縛られているのではないかと恐れていました。

僕が村を出るとき、彼女も共に出来るか、不安でした。

そしてその懸念は現実のものとなりました。

こうなったとき、僕は覚悟を決めることは出来ても、対処する術を持たないのです。

彼女を縛り付けているものの正体を僕は判じません。

村の祭司によれば、山神とは山の化身で、山そのものであるということでした。

人間が山を移動させることなど、少なくとも今日の技術では不可能です。

であれば、僕は村を離れるという選択をしたくはなかったのですが、たとえ僕が残るという意思を決めたところで、村の総意に抗ってこの村で生きる術は存在しませんでした。

「やっぱりソラは神様なんだよ」

必死で見えざる壁に立ち向かうソラに、僕は覚悟を決めました。

「私は神様じゃない。ソラだよ、アオと一緒にだよ。二人じゃないと、あの日の空じゃない！」

これが数年間かけて、僕が築いたソラとの絆でした。

僕は結果に満足するよりも、後悔を感じていました。

ソラに対して僕がしてきたことは残酷なことだったのだろうか。

僕はこのとき決めた覚悟は、自身の死でした。

ソラと離れて、それでも生きることが僕には不可能なのです。

けれど、涙を流して僕を欲しているソラを見て、僕は運命を受け入れる気持ちになりました。

僕はソラの涙を拭きました。

「あの日もこんな風に泣いていた」

「アオがいなくてあの日までの私と同じだよ」

「ソラはここで村を護って。僕はきつと帰ってくるから。ソラが泣かないって言うてくれたら、僕は必ず帰ってくるから」

結果がどうなるにせよ、僕が言うべきことは決まっていました。

このときの僕は何一つ計算を働かせていませんでした。

たとえ帰ってくる事が出来なくても、ソラの涙を止めたかったです。

そして彼女には生きていて欲しかったのです。

ソラはきつと僕と同じ考えに至るだろうから。

彼女は僕と同じ存在だから。

僕が生きる覚悟を示せば、ソラはきつと生きていてくれるに違いありません。

ソラが生きていてくれるならば、僕は生きる覚悟を決めることができます。

僕がここで死の覚悟を示せば、彼女は僕の後を追うでしょう。彼女を生かすただけに、僕は孤独という罰を受け入れよう。

僕は労役の任につきました。

奴婢の扱いは使い捨てるための道具でしかありません。出来るだけ長く労役させるために、簡単に死にはしない程度の待遇でしたが、本当にそれだけでした。

僕達は、生きていることと、働いていること以外に、何も望むことは許されませんでした。

はじめのうちは、寝泊りするための粗末な小屋の中は、毎晩子ども達のすすり泣く声が響いていましたが、数日もしないうちに、彼らは泣く気力も尽き果てていきました。

そして僕は彼らよりも厳しい運命を受け入れねばなりませんでした。奴婢を使役しているのは、やはり下等生物でした。

僕は自分よりも下等とを感じる者の命令に、従わねばなりませんでした。

それは僕の人生の中で最も過酷な日々でした。けれど僕は涙ひとつ浮かべませんでした。

僕とソラは同じ存在なのだという気持ちで、あの村のはずれで認識させられた僕にとって、泣くことはソラを泣かせることと同じだったのです。

僕は一年の間この罰に耐えました。

僕の忍耐力を試すかのような罰はこれだけではなかったのです。

ここに来て一年が経ったとき、労役を監督する役人が変わりました。

この男も当然、僕よりも下等な存在としか感じられませんでした。

僕はこの役人に犯されました。

この現場においては、これはよくあることでした。

以前までの役人は女兒を毎晩のように犯していました。

今回赴任してきた役人が女兒よりも男児を好みました。

そして、その相手に僕が選ばれただけのことです。

それだけでした。ただそれだけだったのです。

けれど、それが僕の忍耐力の限界でした。
これ以上、下等生物にプライドを踏み荒らされれば、僕は狂ってしまふ。

そう考えた僕は、役人を殺しました。
生きたまま目玉を引きずり出し、眼窩に指を入れて、頭の中を蹂躪しました。

そして僕は地獄から逃げ出しました。
追っ手がかかれば逃げ切れるはずもないことは判っていましたが、僕は、僕の力が及ぶ限り生き抜くことを覚悟していました。

僕の目の前には大鬼がいました。
本当に地獄に行き着いたのだと、僕は薄れる意識の中で考えていました。

食事も満足に取れず、山中で僕の命は尽きようとしていました。

僕は鬼に語り掛けました。

「まだ地獄にはやらないでくれ」

鬼は僕をじつと見下ろしています。

この鬼は、下等生物ではありませんでした。

けれども、僕と同等とも感じられませんでした。

そのときの僕は、確かにこの鬼よりも、自分が下等であると感じていました。

僕は鬼に恐怖していました。

ただうわごとのように、まだ死ねない、殺さないでくれと懇願することしか出来ませんでした。

鬼はただ一言、何故だと尋ねただけでした。

「ソラに会いたい」

僕の考えは纏まりを欠いていました。

同時にそれは僕の素直な感情でした。

けれど鬼はそうじゃないと笑うのです。

「わしに頼みごとをしたやつははじめてだ」

意識が途切れる間際に鬼の言葉が耳朵に触れました。

僕は鬼の住処で目を覚ましました。

その部屋には鬼と僕しかいませんでした。

そのことが僕に多大な圧迫感を与えていました。であつた時も感じたことですが、これが恐怖という感情なのでしょう。

僕はそれを初めて感じたのです。

鬼は僕に、人間が憎くはないかと尋ねました。

僕は首肯しました。

下等な存在に貶められ続けた僕は、心のそこから人間を憎んでいました。

鬼はおそらく、それを知っていました。

僕は鬼の手下になりました。

それは復讐でした。

それまで僕が奴等を感じてきた怒りのやり場を、僕はこの場所で見つけました。

鬼は大勢の山賊を従えていました。

僕の眼に映る山賊たちは、鬼に操られた存在でした。

鬼に命令されれば、自身で考えることすらない人形です。

彼らは鬼の前では全ての思考を捨てていました。

僕は出会ったときに鬼が言った「わしに頼みごとをしたやつははじめてだ」という言葉を理解しました。

彼らと鬼との間には、存在の大きさに隔たりがありすぎて、進言することすら躊躇っているのです。

鬼に意見することが出来るのは僕だけでした。

僕は鬼の参謀となりました。

鬼は僕のことを息子と呼び、僕は鬼を親父と呼びました。

彼は僕が目上と認識できる奇跡的な存在です。

僕とて親父に逆らうことは出来ませんでした。鬼にとって僕は同じ舞台に立つことが許される唯一の存在でした。

僕は山賊たちと共に、村々を蹂躪して回りました。

僕は彼らより上位の存在なのです。

下等な山賊に命令を下し、その命令によって下等な村民が奪われ、殺され、犯されるのはそれは確かに愉悦でした。

これは僕为天職だとさえ思いました。

ここは自分の立場を確信できる場所でした。

罪の意識はありません。

僕は当然のことをしているだけなのです。

彼らは僕に支配され、管理され、利用されました。

それが正常なのです。

僕はいつしかソラを忘れました。

彼女がいなくても、僕は生きていくことが出来たのです。

より強大な存在である鬼に支配され、自身よりも下等な山賊を使役して、下等な民から奪い続ける。

この場所は居心地が良すぎたのです。

親父との出会いから数十年が経っていた。

俺は相変わらず山賊を従えて暴れていた。

そのときの俺が最も好んだ標的は貴族だった。

自らの下等さに気づかず、下賤な民を支配している気である貴族たちの勘違いを許容することができなかったのだ。

俺は貴族を捕らえ、目の前で娘を陵辱した。

毎日、幾人もの男を相手にし、誰とも知れぬ男の子を孕んだ娘を見て、貴族は舌を嚙んで死んだ。

その様を俺は毎日じつと見つめていた。

これが俺の見たかった景色だった。

俺は自然と笑っていた。

愉快でたまらなかったのだ。

俺は娘に近づくと、膨らんだ娘の腹を蹴った。

女陰からは水と胎児が飛び出し、娘は発狂した。

山賊のひとりが俺の遣り様を見て、流石は鬼の息子だと褒める。

俺はその山賊を殴り殺した。

下等な存在でありながら、俺を評価できるなど、おこがましいと感じたのだ。

僕は親父を羨ましく思った。

親父の立場こそが、俺の望むものだ。

彼の前では全ての人間が従順な存在だ。

山賊も、平民も、貴族も、彼が許さない限り、口を利くことすらできない。

鬼はそんな絶対的な存在だった。

俺は親父に憧れを抱いていたのだ。

その日の俺は山賊を指揮してはいなかった。

ただ、都の近くにある村を襲わせてはいた。

村を襲った部隊の全滅を知ったのは山賊の屋敷のことだ。

俺は酒を呑む親父の傍で控えていた。

報告をした男は混乱していた。

「妙な女が現れて何事か呟くと、仲間同士が殺し合いをはじめたんです」

その報告が、俺が聞いたその男の最後の言葉だった。

報告が終わらぬうちに、屋敷の中がやけに騒がしくなる。

俺は男に、様子を見てこいと命令すると、男は出て行ったまま帰ってはこなかった。

そして代わりに現れたのは侍だった。

俺は侍を一太刀で殺した。

親父がその様を見て、俺を呼ぶ。

「どうも、まずかったな。貴族を殺したのが、よくない」

俺は恐縮した。

確かにそれは俺の誤りだった。

親父は溜息をつくと、俺を自分の身体の後ろに引っ張り込んだ。苦しさにもかく俺に、親父が言葉を紡いだ。

「侍が出てきたら、もう終わりだ。多分、あの男が率いておるんだろって」

俺には「あの男」というのが判らなかった。

ただ、親父が既に生きることだけを諦めていることだけが判じられた。

「なんといったかな、そうだ、ソラといったか」

俺がその名は俺の耳に懐かしく響いた。

「お前はもう、わしの息子でもなんでもねえ。とつと村に帰って、その娘と懇ろにでもなりやがれ」

やはり親父は死ぬ気でいるのだ。

けれど親父に押し掛かれて、俺は動くことも俣ならなかった。

自分の骨が親父の重みで砕けてゆく。

村に帰る前に、ここで死ぬのかと思ったほどだ。

「やっぱりお前さんかい、ヨリミツ」

俺は、親父と侍との会話をただ黙って聞いていることしか出来なかった。

幾つかの言葉の応酬があり、その後はあたりはやけに静かになった。

俺は親父に呼びかけた。

けれど応える声は無かった。

そして俺の意識は途切れた。

次に目を覚ました時、俺は妖怪たちに囲まれていた。体中が痛い。やはり身動きすらできなかった。

まだ親父の身体が、俺の上に乗っているようだった。

この妖怪たちが何者なのか、そんなことはどうだってよかった。

俺は考えることさえ億劫だった。

妖怪たちが俺に名を尋ねる。

俺は答えた。青鬼だと。

その時の俺は、確かに親父の重みを感じていた。
俺はアオではなかった。

ソラのいない俺は、青空でもなかった。

俺は真実、青鬼だったのだ。

この妖怪たちは下等な生き物ではなかった。

けれど俺よりも上位であるとも感じなかった。

俺は親父に支配されることの心地よさに慣れきっていて、彼らと巡り会ったことを喜べはしなかった。

そしてソラほどに大事だとも思えなかった。

俺は彼らに対して、心底、無関心でいた。

この間、俺が考えていたことは結局、纏まらなかった。

俺はソラに会いたかった。

妖怪たちと触れることで、自分と対等な存在と出会ったことで、俺はソラを対等という美点だけで、共にありたいと感じたわけではないことを知った。

ソラは俺にとって特別な存在だったのだ。

それでいて親父のことも考えていた。

あの居心地の良い場所は、俺にとっての家庭だった。

鬼は、確かに親父だった。

下等な存在でありながら、親父を殺した連中を、俺は許すことができなかった。

結果、身体が動くようになってからの俺の行動は、衝動的なものであった。

俺はヨリミツという名を知っていた。

貴族を誘拐した折に、侍達が駆けつけることを恐れて、調べた武家屋敷の配置の中にその名があったこと俺は思い出していた。

俺はヨリミツの屋敷に火を放った。

そして屋敷から飛び出した侍達を片端から切り倒した。

連中は寝ていたとみえて、武装もなにもしてはいなかった。

寝巻き姿の侍達の屍が転がる中を、ただひとり鎧武者が現れる。

俺の直感が危険を告げていた。

そして確信していた。この男がヨリミツだと。

けれど俺の直感にはひとつ危険回避の役を果たさなかった。

男の姿を見た次の瞬間には、俺の腹に刀が刺さっていた。

「何者だね、君は」

地面に転がる俺にヨリミツが問いかける。

俺は「鬼の息子だ」と答えたが、彼の目は、もう俺を見てはいなかった。

瞬間、俺の身体は何かに包まれた。

俺は思い出していた。

数十年ぶりの感覚だった。

暖かく、優しく、とても良い心地だった。

「ああ、そうか」

漸く判った気がした。

俺はただこうやって抱きしめて欲しかったのだ。

けれど、それは、もう手に入るはずの無いものだった。

あの村のはずれで、一度手放したものだ。

死に行く俺が、都の真ん中で、味わうはずの無い気持ちだ。

たとえ幻でも、こんなにも暖かい。

言葉は自然にあふれ出た。

「親父がな、俺を助けたんだ」

俺は親父を助けられなかった。

そう考えるのはおこがましいだろうか。

「いつもは、心の深まで鬼のように思ってたんだ。それが、なんで助けたりするんだらうな」

あんな親父だったけれど、俺にはただひとりの親だったのだ。

俺の背中を押してくれた。

「親父は、最後に、お前に会って言ったんだ。親父と出会ったときに、俺があのだ獄みたいな労役から逃げてきたときに、俺が言ったことを、忘れてなかったんだ。俺はすっかり忘れてた。馬鹿みたいだな」

俺は度し難い馬鹿だ。

思い出したつもりでいたけれど、結局ここで血反吐を吐いて地面に這いつくばっている。

そして最後の最後で、本当に思い出すことが出来た。

俺は失ってから理解するばかりだ。

「ソラに会いたい。俺にはただ、そればかりだったんだ」

ごめん、親父。ごめん、ソラ。

手を伸ばしても、あの日のソラには届かない。

そして俺は空に抱かれて眠りについた。

朝がきたのか、夢が終わったから自然と目が覚めたのか。

俺は暗い部屋の中でふらつきながら、窓へと歩み寄る。

そして手探りで窓を開け放ったが、そこにあるのが青空なのか、曇天なのか、朝なのか判らなかった。

あれから何百年経ったのだろうか。

ソラは今もあの山の上で泣いているのだろうか。

それとも誰かと共にあるのだろうか。

もしかしたら消えてしまったのかもしれない。

確かなことは、俺が彼女の手を取ることは、ない。

あの時、彼女の手を離してしまったのだから。

彼女を選ぶことが出来なかったのだから。

自分が本当に選ぶべきだったものに気がついた時には、俺は幻に抱かれて眠る間際だった。

もう一度選択肢を与えられたのなら、俺は彼女を選ぶだろう。

けれど、その機会は失われた。

それを示すかのように僕は光を失った。

身体を風が吹き抜けてゆく。

俺は空に向かって手を伸ばす。

そこに俺の手を取るものがいなかったとしても。

僕は永遠に救われないのだと知ってもなお、意味の無い行為に希望を託す。

あの日の青空を掴もうと、必死で伸ばす、その手に触れるものがあった。

「アオが泣くなんて、変なの。あの日と逆だね」

オソンの子ども2（後書き）

次で完結です。

オゾンの子ども3

「何でお前なんだよ」

男の声が部屋に響いた。

俺の襟首が絞まり、身体が宙に浮く。

「ダメだよ、サブ」

制する声は少女のそれだった。

俺はこの声の主を知っていた。

その声に対して問いかけようとする。

「ソラなのかつぐえ」

僕の襟首をしめる力が弱まらない。

苦しい。なんだこいつは。

馬鹿な、俺はこんなところで死ぬのか・・・

「サブ、だめだってば。手を離してよ！」

少女の声にも全く反応した様子もなく、ますます力は強まっていく。

俺はもう虫の息だ。

「そっか、もうサブにも聴こえなくなってるんだ」

少女は何か納得したようだが、まずは俺を助けて欲しい。

部屋の中にまた別の声が響く。

その発音は拙かった。

「サブサン、駄目デスヨ。死ンジヤイマスヨ！」

俺を殺しかけていた力が弱まる。

「けどなあセイ、俺は納得できねえよ！」

ソラ、その言葉を聞いて俺は確信した。

俺は必死で呼びかける。

「ソラ、ソラなのか！」

「うん、私。ソラだよ。もう全部思い出してるんだね」

「さっきまで、夢を見てたんだ。ソラと過ごした村から、俺が死ぬまで・・・」

俺は夢の内容を思い出し、言葉を詰まらせる。

そうだ、もう届かないはずのこの手が、ソラに届いたんだ。

「ゴンが化かしたんだよ。アオをあの上に返してくれたんだ」

「ソラの頼みだからだよ。こんなやつ、永遠に苦しめば良いのに」

「それに、サブやセイがアオを捜してくれたんだよ」

近くでは、先刻の二人が未だ言い争っている。

「ソラサンガ選ンダコトナラ、僕ハ・・・」

「俺ア納得してねえぞ！」

声が交錯する中、俺は涙を流していた。

ソラの言葉を聞いているだけで、言いようもない安堵感に包まれていた。

俺はただそれだけのことで確かに救われたのだ。

ソラの優しい声が俺の耳朵に触れた。

「ずっとアオを待ってたよ。おかえり」

俺は帰ることなんかできなかったのに、ソラはおかえりと言った。

震える声で、俺は応える。

「ただいま」

「アオ、聞いて。私はもうすぐ消えるの」

俺は愕然とした。

ソラが、消える？そんな、馬鹿な。

「もう寿命なんだ。山が精気を失ってるって、ゴンは言ってた。だから、みんなとアオに会いにきた」

「そうか、でも！来世でもその次でも、ずっとソラを待ってる！だから、だから・・・」

俺の声は力を失くす。

ソラに、来世はあるのか？

神様は、死んだらどうなる。

いや、ソラは消えるといった。

消えたら、もう会えないのか？

俺の言葉を肯定するように、ソラが言った。

「消えるの。もう、みんなにも、アオにも会えないの」
俺は頂垂れた。

どうすればいいのかわからなかった。

ソラは、何百年も、俺を待ち続けて、それで生を終えるのか。
それだけが悔しかった。

全て俺のせいだ。

俺がソラの一生を縛ったんだ。

それでも、謝ることなんて出来ない。

ここで俺が謝ったら、ソラの待ち続けた時間を否定することになる。
そんな残酷なことが出来るわけがない。

俺は喉まで出かかった自己満足な言葉を飲み込んだ。

ソラとは別の、女性の声が部屋に響く。

ゴンと呼ばれた声だった。

「ソラは輪廻を外れているんだよ。消えたら、大気となって、この
世界を漂い続ける」

今の俺はひとつ選んでいた。

なにかひとつを選択しなければならぬのならば、必ずソラを選べ
るという確信があった。

これまでの俺が選択し続けていたのは自分自身だった。

自分が一番大事で、それ以上に護るべきものや思いやるべき存在は
何一つない、そういう人間だった。

けれど、このときの俺は、この世界に独り取り残される自分よりも、
空のかなたで、誰からも自身の存在を認めてもらえないソラを思い
浮かべていた。

寂しがりやのソラが、独りで空の上で泣いている姿を思い浮かべると、
今までの人生で味わってきた何物よりも苦しかった。

出来ることなら代わってやりたかった。

俺は術を求めて問いかける。

「どうにか、ならないのか。ソラが独りで居ないための方法は、例えばそれが俺じゃなくてもいい。誰かソラを助けてやってくれ」

ソラ自身の声だった。

「あるよ」

「アオも一緒に、来てくれないかな」

ソラがくれた、本日三回目の驚きだった。

俺も、行けるのか？空の向こうへ。

「アオにはアオの人生があるし、これから輪廻は続いていくよ。けれど、私といっしょにいれば、全てが台無しになる。その、これは、私のエゴイズムなんだ」

迷うことなどなかった。

まだ続いている彼女の言葉を遮る。

「俺にはソラしか居なかったんだ。ソラは俺の持っている全てなんだ」

彼女は知らないだろう。

俺が彼女の存在で救われたことを。

繰り返していく地獄のような輪廻を。

彼女の提案は、その全てから俺を救い出してくれるのだ。

「私を選んでくれるの？」

ソラの声は震えていた。

それはきつと悲しみではないだろう。

喜びに震えている、そう思えた。

漸く、彼女と意思が通じたような気がした。

もしかしたら俺たちは、青空になんてなれていなかったのかもしれない。

何百年もかかって、やっと繋がったのかもしれない。

そして俺たちは、ずっと二人で、空の一部になる。

本当にあの青空になれる。

俺は真つ暗な闇に手を伸ばす。
その手を掴んでくれる存在がいる。
ここには確かに青空があった。

「私は反対したんだけどねえ。ソラが言うんじゃ、しょうがない」
「俺は未だ反対だ！なんでアイツを選ぶんだ」

これらの声に応えるソラの言葉は驚くべきものだった。
本日四回目のことである。

「何言ってるの？皆も一緒に行くんだよ？」

この言葉を直接聞いた者は絶句した。

間接的に聞いたセイとサブと呼ばれた男たちも二の句を次げなかった。

「ごめんね、サブ。私、何百年も考えたけど、選べなかった。だからみんな一緒に行こうよ」

普通、こういうときはひとりしか連れて行けないものだろう。
そんなことを考える暇もなく、ソラの身体が輝き始める。

その光は、ソラと出会った日に僕が見た光だった。

見えないはずの僕の眼に、確かにソラの姿だけが見えていた。
片方の手を俺と繋いだまま、彼女は暗闇に手を伸ばす。

その手と繋がるものが、俺には確かに見えた。

光は僕たちを包むと天井も屋根も突き抜けて、大空の彼方へ、引き絞った矢弓のごとく翔けてゆく。

オソンのダンス（前書き）

エピソード的なアレ

オゾンのダンス

僕は青空に弧を描いて空のかなたに消える。

人でも神でも妖でもない、何かになる。

三つの想いが手を取りながらクルクルと回り続ける。

回り続けて、僕らの思いが融けてゆく。

空よりももっともつと高い場所です。

青い月夜に踊る、光の粒になる。

オゾンとは、3つの酸素原子からなる酸素の同素体である。

中心の酸素原子と両端の酸素原子の結合は、2本とも等価であり、オゾン分子は2つの極限構造から成る共鳴混成体であると考えられる。

オゾンのダンス（後書き）

このオチは、「あぶない子ども1」を書きおえた時点から決まっていた。よく考えたら、このギャグタッチなノリは必然ですね。

オチがハッピーエンドすぎますからね・・・

もっとシリアスで幻想的になると思った俺は馬鹿ですか。

今まで頑張ってシリアスなノリを維持してきたのに・・・

まあ元ネタの「オゾンのダンス」って曲もアレなノリですしね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892/>

オゾンの子ども

2010年10月12日12時17分発行